共に学ぶ

学校支援ボランティアセンター（SSVC）

第３２号（年２回発行）
狭山市学校支援ボランティアセンター
＜事務所＞
狭山市狭山台1－21
狭山元気プラザ内Ａ棟３Ｆ
☎／Fax　04-2927-1395
Ｅ－mail：sayama-ssvc@bd.wakwak.com
電話受付：月・水・金曜日午後１時～4時迄

子供たちの記憶に残る活動に

狭山市教育委員会　社会教育課　課長　石井　巳代子

日頃より、狭山市学校支援ボランティアセンターの皆様には、市内小・中学校への学習支援につきまして、多大なるご貢献をいただいておりますことに感謝を申し上げます。

新型コロナウィルス感染症が拡大しはじめて３年以上が経過し、いまだに収束が見えない日々が続いておりますが、今年度は感染症対策を取りながら皆様の工夫により活動も再開できました。その活動が徐々に活発になるにつれ、多くの人々がコミュニケーションをとることの大切さを実感することで、学校にも活気をもたらし、子供たちの記憶に残る大切な思い出となっていくことでしょう。

子供たちを取り巻く社会環境や教育環境が大きく変化している中、課題に取り組むボランティアの皆様の姿勢を頼もしく感じております。今後も、子供から大人まで元気に活躍し続けられる社会、安心して暮らせることができる社会、「持続可能な社会」の構築に向けて、引き続きお力添えをお願いします。

今後の社会教育課の事業といたしましては、地域学校協働活動にも取り組んで参りますのでご協力をお願いいたします。

持続可能な地域づくりに向けて

SSVC 事務局長　山田　恵一

ＳＳＶＣは文字通り「学校支援」を行うための組織として活動して来ましたが、学校運営協議会の設置に続いて、狭山市でも「学校応援団」を「地域学校協働活動」に進化させる動きが始まります。

「地域学校協働活動」では、自分の住む地域が末永く住み良い（住み続けたい）地域であり続けるためには、どうあるべきかを考え、目標を共有して「学校を核とした地域づくり」を進めることが求められます。これまでも、生涯学習と学校教育の連携という形で活動して来ましたが、これからは地域づくりとの連携が重要になると考えねばなりません。研修会に参加して各地の先進事例の発表を聴かせて頂くと、むしろ、地域づくりをどうするか、の議論を先行させる必要があるように思いますし、持続可能な地域づくりのためには地域人材の育成が大切だ、ということも勉強させて頂きました。

その一方で、不登校児童生徒の増加が大きな問題になっていますが、子どもたちに「自己肯定感」「自己有用感」を持ってもらうための活動は、コロナ禍による制約下でも怠る訳には行きません。

既に一部の学校では取り組みが始まっていますが、活動に参加する私たち自身が楽しみながら、積極的に関わって行く「こころの若々しさ」を持ち続ける必要があると思います。

狭山市を「住み続けたいまち」にするために、これまで以上に先生方や地域の有志の方々との連携を図りつつ、活動を進化させて行きたいと願っています。

全国的にもまだ珍しいＳＳＶＣの存在が注目を集める③

～～今までを振り返り、エピソードや今後の展望などシリーズで掲載中～　前 SSVC センター長　諸井 寿夫

当センターの活動に対して、県内外から来訪や活動内容の講演依頼が増大して、ある期間でしたが嬉しい悲鳴でもありました。その引き金の一つは、朝日新聞の全国朝刊紙上（2011.2.4）に「朝日のびのび教育賞」の受賞が発表され、その理由は「各学校に担当者（ＣＮ）を置き業務ごとにグループ制を敷くなど組織的に運営している」と評価を頂きました。また文科省主催（2012.10.2）の「学びが生み出すアクティブシニア」をテーマに県教育委員会ルートの要請があり、全国の関係者が集まる文科省の霞ヶ関講堂を会場に SSVC の事例発表をしました。尚文科省の HP には、詳細な議事録が掲載されており、アンケートでは「高齢者の活動として感動した」と記されています。このように全国版となるメディアが源となり、関係者の注目を集めることになったのだと思われます。従いまして、問い合せも多く、当方の広報担当にカウントしてもらうと２５団体が来訪頂いたということです。来訪者として、宮城県の市議会メンバー、長野県、神奈川県の県教育委員会、或いは、大型バスで視察に来られた久喜市などです。また講演については、千葉市、長野県南アルプス市など、県教育センターのある行田市での発表では、「全国モデル」にと応援していただいたことは、とても勇気づけになったと思っています。また機関誌などへの執筆要請もあったことも追記しておきます。

（2012.10.2　文科省霞ヶ関講堂にて事例発表）

時は、前後しますが、このセンター設立準備、運営のため多くの研修会、講演会、教育現場見学会を開催しました。「学校支援とは、どんなことをするのでしょうか？」と支援員の募集だけでなく、我々も未知の世界で、橋本先生（日本ボランティア学習協会元副代表）には、たびたびご足労頂きご指導をお願いしましたが、その成果を全国に PR して頂いたこともあり視察、講演の要請が舞い込んだことに感謝を申し上げます。

当時は全国的にみても学校支援の活動は珍しい存在で、当センターの先駆的な展開が脚光を浴びましたが、その後世の中の大きな変化に対応した斬新的な学校支援の展開を検討することも必要で、高齢化対応と若い年齢層にも関心を持っていただき、結果関係者のモチベーション向上に繋がることになると思っています。

（次号予定　教育委員会より新たな学習支援事業の要請を受ける ④）

第 25 回日本ボランティア学習学会　島根大会

SSVC 事務局長　山田　恵一

これまで、様々な場面でご指導を頂いている「日本ボランティア学習協会」が毎年開催している研究大会が今回は島根県で開催され、地域学校協働活動の実践事例として発表する機会を得ました。

現地の会場と Zoom を利用したリモート参加を併用した形でしたが、ＳＳＶＣの活動内容、設立の経緯と１６年間、活動を継続する上で工夫して来た内容をお話しさせて頂きました。

ＳＳＶＣの発表の後、橋本洋光先生から地域学校協働活動（＝学校を核とした地域づくり）を実効あるものにするために留意すべきことに関して補足説明があり、会場の参加者からは「学校の先生とのコミュニケーションはうまくできているのか？」との質問を受け先生方がお忙しいので苦労している旨答えました。

その後に分科会が行われましたが、第４分科会は「ボランティア学習で、子どもたちが動き、大人が動き、ひとづくりの好循環、地域づくりの盛り上がりを創り出そう！」というタイトルで、子どもたちが自分の意思で地域の活動に参画する場を創り出している、島根県内の３つの事例が発表されました。

これらの事例は、２０１７年から順次改訂された学習指導要領の根幹である「主体的・対話的で深い学び」を子どもたちに体験してもらうために正に合致する活動であり、活動を通して子どもたちに郷土愛を育むことが、活動の継続性を担保することになると感じました。

私たちも学校支援に参加するに当たって意識して行きたいと考えています。

校長先生 こんにちは ３１

心強かった支援活動

狭山市立南小学校　校長　山本　昭

本校は、昭和４５年４月、入間小学校から分離開校しました。児童数急増に合わせて開校し、その後、昭和５４年の1,315名をピークに児童数は減少に転じます。そして、平成２３年３月に今度は入間小学校が閉校となりました。今ではその歴史も引き継ぎ、開校５３年目を送っています。富士山をはじめとする山々が美しく、茶畑に囲まれた緑豊かな環境のなか、今日も元気な南っ子の声が校庭に響いています。

私とSSVCの支援者の方々との思い出は狭山台中教諭時代にさかのぼります。当時、台中南校舎内にSSVC事務局が設置されていました。私は担当教科である国語科の授業を手厚く支援していたただきました。最初の１年は漢字学習の支援をいただきました。その後、ことわざや四字熟語、百人一首と思いついた案を相談すると快く支援の内容を広げてくださいました。なかでも中学３年生の選択授業では入試に向けた作文対策にほぼ個別支援に近い形で支援をしてもらいました。苦手な生徒ほど個別の支援が必要です。着実な積み重ねが実現でき、何より生徒が幸せだったなと懐かしく思い出します。

その後は、狭山台中、入間川中の教頭としてお世話になりました。コーディネーターの方に支援の相談をすると、オーダーメイドのように対応していただきました。生徒の困っているところ、学校の困っているところに、さっと手を伸ばしてくださる心強い学校の味方でした。新型コロナウイルスの感染拡大以降、支援をお願いする機会が限られてしまったのが残念でなりません。それでも、新たな支援策を思いついた時には、また相談をさせてください。

水富小 一年生足し算引き算の演習支援

水富小コーディネータ　矢野 公正

コロナ禍の影響が下火になり、水富小学校で対面の支援が行えるようになりました。そこで学校から要請があったのが一年生の加減算演算の支援です。

支援者が座っているところに児童が一人ずつ立ち、児童が持ってきた問題記載カードの束を受け取り、一枚一枚問題を児童に示して答えを言わせるというものです。二分間で持ってきたカードの束のうちどれだけのカードの回答が言えるかの演習です。

この支援を一学期にまず実施し、これはいいなということで、さらに引き続いて二学期でも支援の要請があり実施いたしました。

当初一学期では一桁回答となる加算問題だけでして、最初は指を数えながら答える児童も多くいてなかなか答えが出てこない場合がありましたが、一学期が終わるころは時間内に手持ちカードの問題をすべて答えられる児童が増えました。二学期になると桁上がり含む一桁の足し算や引き算も加わり、さらに難しくなりその成長を直に感じることができました。

支援者約10名のメンバーで毎週月曜日割り当てを決め、３名から６名での支援でした。孫のようなかわいい児童たちが元気な声で答えを言う様は大変ほほえましいです。この辺をしっかりできるようになれば、学年が進んで九九等が加わり難しくなりますね。この先全児童が授業についていけるようになるように最初が大事だと思いますので、今後もSSVCで支援していきたいと思います。

支援募集の際はぜひ手を挙げてください。

教科別研修会・交流会（算数・数学）

人材バンクグループ　有田　茂

コロナ禍で休止していました教科別研修会･交流会をオンラインと元気プラザ大会議室で同時に 11 月 15 日（火）14:00～16:40 に開催しました。今年度は算数・数学で「小学校算数・中学校数学で学ぶ学習の内容」を狭山市教育センター今福所長のご協力を頂き、狭山市教育指導課の新井指導主事による講演のビデオで行いました。参加者は、Zoom で 10 名、元気プラザ大会議室に 11 名、合計 21 名でした。

内容は、Society5.0 の社会を担える人材を育てるため、「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づいた授業内容になっており、まずは「周りから勉強しろ」と言われる子、「自発的に勉強する子」の相関図で一番成績が良かったのは「自発的で周りからはあまり言われない子」であったことに加えて、大谷翔平選手が高校１年の時に作成した目標曼荼羅の紹介があり、目標を持って主体的に行う事の重要性に理解が深まりました。

また、小学校１年生から中学３年生までの算数・数学に各学年の関連性があり、小学校 1-2 年でつまずくとその後の理解に大きく響くことも納得できました。最後に算数６年生の授業の進め方と実例問題を通して「対話的で深い学び」について理解を深めました。

講義を受けて感じたことは、算数・数学に限らず、すぐに答えを教えるのではなく、「さっき、先生からなんと教えてもらったのかな？　そうだね、それを使って解いてみよう」のような対話的な支援が出来れば良いなと思いました。

また、すべての教科で「主体的・対話的で深い学び」を念頭にして支援に生かしたいと思いました。

講演後、出席者の間での意見交換でも参考となる事がたくさんありました。

学習支援員養成講座の課外学習として

人材バンクグループ　有田　茂

新規ＳＳＶＣ登録者を対象に年２回行ってきました学校見学会ですが、コロナ禍で２年間中断しておりました。今回、学校見学会に参加者を学習支援養成講座の受講生だけに絞り、柏原中学校の稲葉校長先生の協力を頂き 10 月 31 日（月）13:30～15:00 で開催することが出来ました。

吉田教頭先生から柏原中学校の説明と SSVC の支援に対するお礼の言葉がありました。教頭先生のご案内で１年生から３年生全ての教室と理科実験室に入り授業している様子を生徒の傍で見学しました。参加された方は、教室に入る機会は今までになく、現場の様子が実感できたと思われます。又、支援員の控室の確認や現在支援中の「あしあと」ノートを目にして、現在の距離を置いた支援を実感して今後出来るであろう対面での支援を期待していました。

2023 年度学習支援員養成講座の案内

人材バンクグループ　講座担当　石井宏晶

本年度までの３年間、コロナ禍の状況でオンラインによる授業でしたが、来年度は元気プラザで対面授業の予定です。是非、ご参加下さい。

私たちが小中学生の頃は「何を学ぶか」と知識詰め込み主義の教育だったと思いますが、最近の教育事情は「何ができるようになるか」に変わってきています。更に、ICT を活用した GIGA スクール構想実現や、「主体的・対話的で深い学び」の実現といった「新しい日本型学校教育」を学び直してみませんか。

また、近年増加傾向にある不登校の児童生徒の心をどう理解し、どう支援していけば良いのでしょうか。いじめの問題に対応するのも重要な支援活動です。

本講座では、前半でこういったテーマについて議論して頂き、後半は具体的な教科別支援の事例紹介や、教育現場の見学に参加して戴きます。

詳細は、市民大学が発行する「受講生募集案内」をご覧下さい。

「共に学ぶ」のバックナンバーはこちら